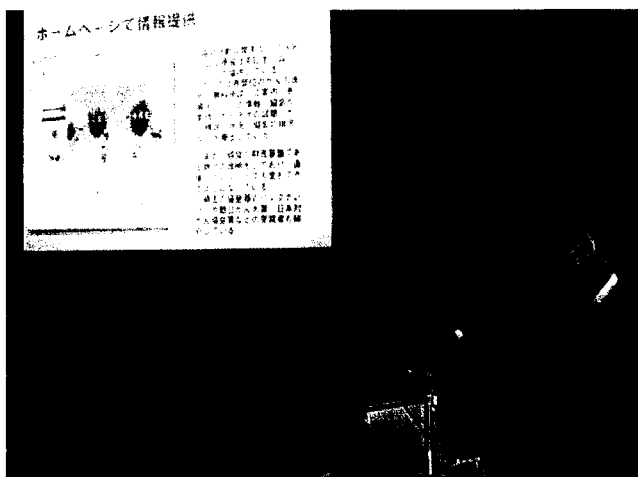


広告特集を組んだりという形で、これは全国の方々に理解をしていただくためにやっております。

それからAC公共広告機構のキャンペーンというのがございます。ここでは社会貢献をやっている各団体を取り上げて、テレビとかポスターとかあるいは新聞広告などがありまして、それぞれ全国のメディアを通じて流していただきます。これは、広告の制作費以外は無料でございます。メディア費としては相当な額になると思います。数億円規模のメディア費になるのではと思います。ことしは山田邦子さんにご登場願っております。ポスターは1万部刷って、駅の看板などご覧になった方々も多いかもしれませんが、こういうキャンペーンに参加しております。

続きましてホームページでもがんの部位の説明でありますとか無料相談のご案内でありますとか各種イベント、協会が作り出したビデオもそこで視聴できるようになっており、協会の現況や、がん検診受診者数も伝えております。また、このサイトを通じて寄附を募集するようなこともやっております。

続きまして、イベントですね。イベントはがんセミナー、あるいはリレー・フォー・ライフなどを実施しております。まずは講演会をやります、がんについての知識、普及啓発を実施します。



セミナーだけで年間十数回程度開きますが、聴講者はトータルで1万3,000人程度になります。

それから、リレー・フォー・ライフというイベントを開催しておりますが、ことしで4年目になります。これはアメリカ対がん協会が従来からやっておりましたイベントがございまして、20年ほど前からがん征圧のための寄附を集める

ために競技場などに集まってトラックを1周したら寄附をくださいというふうなことから、アメリカ対がん協会のドクターが始めたものであります。日本では06年秋に筑波大学でやったのを皮切りに、去年は6会場でやらせていただきました。参加者は1万人を超えました。来年度は既に十数会場が決まっております。アメリカ対がん協会では年間大体5,000会場でやりながら、寄附の金額としては400億円から500億円をそこで集めているという規模のものであります。がんの患者、家族、支援者、一般の方々がお集まりになって連帯意識を高めながら寄附を集めるというものであります。

次に、もう一つ、ピンクリボンフェスティバルも実施しております。これは乳がんに特化したものでございます。これも山田邦子さんにはお世話になっておりますけれども、東京、神戸、仙台という会場を中心に朝日新聞社と協会が中心になりまして、まず10月1日

の都庁のピンクへのライトアップ、その他レインボーブリッジだとか、神戸のポートタワーとか、そういったところを一斉にピンクでライトアップして、ピンクリボンとはどういうものである、乳がんというのはどういうものであるというご説明をします。それから、健康をかみしめながら患者の方々とともに歩くスマイルウォークをやっておりまして、08年度は1万2,200名、シンポジウムには2,300名が参加されました。

それから、ビデオとかDVD、ポスターなども制作しておりまして、また禁煙に関するポスター、ピンクリボンでお配りするリストバンドやバッジをつくるなどの活動もやっております。

同じような話であります、啓発のパンフレットなど印刷物も発行しておりまして、各種、それぞれ無料でいろんなところに配布しているということでもあります。

協会の収入、先ほどからも寄附に言及しておりますが円グラフで昨年度の協会の寄附金収入を書いておきました。分かりにくいかもしれませんが、左側に寄附金収入、1億9,500万となっております。まだこの程度しか集まりません。今年度は2億9千万になると思いますがこの程度の寄附金収入です。前回に島根県方式が紹介されまして、同じような規模を集めていらっしゃるの相当すごいなと思いました。寄附金収入の内訳は右側になっております。えび茶色の部分、あれが法人のシェアであります。つまり、企業からいただくお金。その左上の紺の部分、これが個人の皆様方からいただくお金。それからもう一つは紫色のものがありますが、これはほほえみ基金といいまして、乳がんの特化した形の寄附を集めており、ピンクリボンを中心に相当脚光を浴びておりますので、この程度の大きなシェアを占めております。

それから、使い道ですが、今いただいたお金を、ではどう使うのかということですが、一番大きいのは知識啓発費ということで、冊子を発行したり機関紙を発行したりポスターをつくったりというところの啓発活動、グラフでは緑色の部分が一番大きいということですね。その他、赤い色で調査、研究、これについては地方研究団体を奨励したりとか、あるいは若手医師に奨学金を出したりとかという活動もやっております。

外部組織とどういう連携、協力関係を持っているか。真ん中に丸い楕円があり、これを対がん協会とみなしていただいて、厚労省と協力連携関係を持ち、メディアあるいは協賛企業と色々な情報発信をしていただいたり、あるいは寄附・協賛金をちょうだいしたりということで連携しています。それから、患者会、あるいはほかの征圧団体それらとイベントで協力したり患者支援を行ったり、左側に行きましてがん診療連携拠点病院、がんセンター、がん研有明などの医療機関とも研究の協力をしたり奨学医をそこで面倒見てもらったりということをやっておりまして、下には全国の支部、これはそれぞれ、がん検診をやっております。

支部で実施しているがん検診の実施状況も今日ご紹介したいと思っております、これは最新の数字であります。まだ08年度は3月までかたまっておりませんので、07年度の数字になります。胃がんから始まりまして、子宮頸がん、子宮体がん、乳がん、肺がんにつながりま

す。全国の46支部ありますが、中で5支部は検診をやっておきませんので、トータルで41が一番多い数字であります。例えば胃がんでご覧いただきますと07年度で41支部が実施しております、受診者数は250万9,780人という数です。06年度からは若干伸びておきまして、5万2,694人伸びている。伸び率は2.14%でした。ただ、06年度は減っており長期的には漸減傾向にありました。左のほうにまた戻りまして07年度のトータルで1,155万4860人、大体1,200万人ぐらゐの受診者を私どもで引き受けておきます。私どもがやっておりますのは各地にある施設検診、病院のような検診機関もありますが、主には検診車、エックス線検診車など、皆さんはバスのような検診車をご覧いただいていると思っておりますが、その検診車は胃で373台、子宮で92台、乳房で119台など保有しており、全体で956台、大体1,000台ぐらゐの検診車を全国に回しております。市町村検診における協会のシェアは胃がんで73%、子宮頸がんで75%、子宮体がんは25%、乳がんで71%、肺がんで65%、大腸がんで55%。私どもの支部が受託している市町村のカバー率は大体55%ぐらゐから70%ぐらゐです。

それから、ちょっと気になることがありまして、皆さんにご紹介しておきたいんですが、08年度の4月から12月までを見ますとかなり落ちております。表に書いておきましたが、胃、肺、大腸、乳、子宮だけ調べました。括弧内の数字は1割以上、つまり大幅に落ちたところで、胃では13支部、肺では18支部、大腸では13支部が落ちたとなっております。前年は1割以上落ちたところが胃で4支部であり4から13ですから、かなり落ちているということが言えると思っております。受診者数では胃で9万8,000人、肺で26万人、大腸で7万2,000人、子宮で2万4,000人という数が落ちました。これにつきましてはいろいろと原因が考えられます。特定健診・保健指導が4月から導入されました。一般の会社にお勤めの方の奥さまは、これまでは市町村が実施する検診機関に行っているだけけれども、今年度からはあなたは健診は受けられないですよと言われてます。ただ、がん検診だけは受けられます。特定健診は保険者の義務ですから、国保の場合は市町村に義務がありますが、会社勤めの方の奥さんというのは、これは会社に義務があるわけです。去年まで受けられていたのにことし行ったら受けられないという健診になりますね。ですから、あなたは駄目ですよと言われてがん検診もともにやめてしまったというケースもあります。

それから、若い世代の検診離れもあります。市町村合併により自己負担金が増加したケースもあります。ところが、乳がんだけは伸びております。なぜ伸びているのかと申しますと、やはり啓発普及活動なんですね。先ほど申し上げましたピンクリボン事業を全国に展開して、いろんなところがピンクリボン事業をやっていただいておりますから、これによって乳がんに関する普及が高まる。それから、山田邦子さんをはじめアグネス・チャンさんもそうですけれども、皆さんが、乳がん経験者の方々が声を大にしていろんなところで言っていただけ。それでやはり啓発普及されるんですね。また、去年は乳がんをテーマに取り上げた映画が結構多かったですね。3つほどありました。それが上映されたということで、やはり知識が高まる。普及啓発をやれば、がん検診受診者はこ

れだけ増えるということの、これは証明ではないかなというふうに思います。  
雑駁ですが、以上であります。

○中川座長

塩見さん、ありがとうございました。  
委員の皆さん、あるいは会場からご意見。  
予算は少ないですね、本当に。

○塩見委員

そうですね。寄附の。

○中川座長

寄附ですね。

○塩見委員

アメリカ対がん協会、この席でも前回申し上げたかもしれませんが、1,100 億円ぐらいの収入がありますね。そのうち、四、五百億円が先ほど申し上げたリレー・フォー・ライフというイベントで集めます。あとは個人のほうが多いんです。個人の寄附と法人の寄附は7対3で個人のほうが多いんです。私どもは先ほどグラフをご覧いただきましたように7対3で法人、企業のほうが多いですね。やはりそれはドネーションをするという考え方、意識、カルチャーが日本とは異なりまして社会貢献に非常に熱心な国民であると思えます我が国では非常に少ない、だからなかなか事業ができにくいということは言えると思いますね。

○中川座長

また、ちょっとその辺りは懇談会の場で、この2部の中で少し議論できればと思います。最後に言われた検診受診率が下がっている、これはまだ確定データではないわけですが、しかし、そういった報道が残念ながら相次いでいますので、やはりかなり危機感を持っていく必要があつて、これはよほどのことがないと目標を達成できないですね。ですから、厚労省だけではなくて国民全体のこれは大きな問題だというふうに考えていただく必要があると思いますが、それでは引き続きまして、がん検診—富山県の取組について—、富山県厚生部健康課主幹の加納紅代さんからお願いいたします。

○加納参考人

よろしくお願いたします。

私のほうからは、富山県でおよそこの20年間、がん検診の受診率を向上させるために具

体にどういったことをしてきたかということについてご紹介したいと思います。

これは、昭和58年から平成17年までの富山県における市町村で行われている、市町村がん検診と言われているものの受診率の推移でございます。左側が胃がん、右側が肺がんでブルーが全国値で富山が赤です。いずれも国のガイドラインに基づいた方法、胃がんの場合はバリウムを飲んでいただく、肺がんの場合はプレーンの胸部レントゲン写真を撮っていただくという方式のものでございます。どちらのグラフを見ても、大きく伸び上がっている部位があることをお気づきでしょうか。これが平成元年に大きな節目があって、このように全国と比べて非常に高い、全国と比べてですが非常に高い検診率にシフトしていく大きな転機がございました。これは50%で切っているのは、今の日本国挙げてこの50というラインを目指そうというところなのですが、高い肺がんであってもまだまだ50には届きそうで届かない、胃がんはまだまだという段階ですし、大腸がんと乳がんに至ってはやはり富山が赤、全国値青で昭和58年から平成17年の間、いずれの年においても富山の受診率のほうが全国を上回った数字が出ているのですけれども、しかし50%には全くジャンプしてもホップ・ステップでもなかなか届かない状況が続いているという現状でございます。

では富山県、実際にどういった取組をしてきたかという中で1つだけ乳がんについて、これはやはり国のガイドラインに基づいた手法ですので、大腸がんの場合は潜血、それから乳がんは視触診ということを中心にしてやってきたんですが、平成13年、富山は全国に先駆けてと申し上げてもよろしいのでしょうか、市町村検診全ての市町村にがん検診マンモグラフィを導入して始めております。

では、実際ですが、富山県、県全体として行ってきたこと、主なものですが、まず手間、暇、お金の中から金銭のことについて富山県では節目年齢者——5歳刻みなんですけども——のがん検診料に助成を行っています。これは、ある程度お金ということ、負担の軽減というよりはむしろキャンペーン効果というか、そういうものをねらったの節目検診への助成であったかと思えます。また、特徴的なものとして、がん対策推進員、ボランティアさんがいます。富山にはがん対の推進員のほかに母乳育児を推進する「母推さん」と言われている方と、あと、食生活改善推進員という「食改さん」とみんなに呼ばれている三大ボランティアの団体があります。その中のがんを担当してくださるボランティアの方が受診勧奨活動をしてくださるということなんですけど、実際には、例えばある市ではがん検診の時期が参りますと、スーパーに行ってもどこに行っても桃太郎旗というピンク色の旗が立ちます。どこに行っても桃太郎旗があります。今日、山田邦子さんが来ていらっしゃるような美しいピンク色の、もうちょっと旗は安いんですけども、そういう旗がショッピングセンターから道路とかに全部立ちます。それを見ると、もう乳がん検診に行かねばならないと、なるまいと体が動くのではないかというふうに私も見まして、あざやかな……。

○中川座長

何旗ですって。

○加納参考人

乳がん桃太郎旗です。桃太郎の桃が書いてあるピンク色の旗が立ちます。といったことを、がん対策推進員の方がやっけてくださいます。

またもう一つ、これはこれからも、私どもの大きな課題とっていますが、商工団体、要は職域のがん検診について、これは最近ですけれども、啓発活動や検診企画事業へも助成をさせていただいています。

あと、がん予防ポスターというものも実際に富山県でオリジナルのものもつくっていき、一昨年からは厚生労働省のほうでがん診療連携拠点病院といったフレームをつくっていただいた、そのおかげもありまして、がん診療連携拠点病院に配置され、いらっしゃる専門医の先生にご協力いただいて、富山県ケーブルテレビは100%のカバー率ですので、それを利用して実際にそのマンモグラフィーというのはどういうものかというのを看護師の方に実際にモデルになっていただいて、実際におっぱいをつぶしてぎゅうっと撮るような形も動画でもってCATVで皆様に見ていただくといったような形もっております。

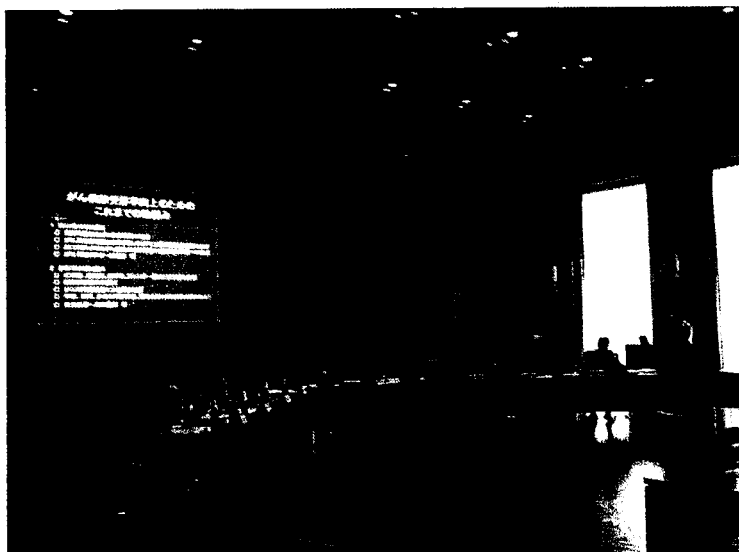
今度は実際、市町村検診ですので、検診をしてくださっていた市町村の取組ですけれども、あの手この手、マルチチャンネル、ここまでやれるかというぐらい、広報誌を使ったり回覧板を使ったりはがきを使ったりカレンダーを配ったりということで普及啓発をしてくださっています。

個別にももちろん受診の案内をいたしますし、今はなかなか情報の管理というものが難しくなってきたんですけれども、例えば婦人会の方のご協力などをいただいて個別で訪問をしたり、未受診の場合はお宅まで行って、なぜ受けないのというような形でひざ詰めで、問い詰めるわけではありませんけれども、行きましようねと、こんな感じでみんなを受ければ怖くないという状態になっているということのようでございます。

それから、いろんな形態をつくっているということです。

節目検診について簡単に。対象としては、今年度、胃がん検診、乳がん検診では40歳から60歳の40、45、50、55といったところの年齢の方がお受けになる方には検診料が、自己負担がかなり低い、場合によってはほとんどないという状態まで補助をします。肺がん検診、これは低線量のヘリカルCTでいろんな議論があるかと思うのですが、これについても節目年齢に助成をしている。それから、子宮がん、実際には子宮頸がん検診ということだけではなくて、体がん検診をセットでやっておりますので、そういったものについても節目検診の助成というのも、金額は余り多くないのですけれども、助成をさせていただいているということです。

実際にそのがん対策推進員ですけれども、富山県で今どれぐらい活動されているかといいますと、約4,000名の方、ほとんど女性が中心なんですけれども、そういった方が活動してくださっております。養成が始まったのは平成元年、先ほど大きく受診率が上がっていた年と一致するのですけれども、



平成元年に富山県として推進員、5,000名弱の方の養成を始めました。その後その推進員のリーダーというものを養成して平成10年からは県ではなくて市町村が独自で養成、養成というのはがんの知識を勉強したり一緒に普及啓発に回ったりという活動をしてくださる方のお世話というものを市町村でお願いできるという体制になっております。

もう一つ、これはこれから私どもが力を入れていきたいと思っています中小企業の方のがん検診をどうやって推進していくかということです。これについては2つ軸を置いて、まず、がん検診普及のための両輪、普及啓発を推進するというので、講習会を行ったりパンフレットを作成するということについても、助成をわずかながらさせていただくというところでございます。

それから、「事業所におけるがん検診の推進」ということの一番上なんですけれども、がん検診の企画立案及び事業主との調整と、結構難しいことが書いてあるんですが、実際にはこれからもやっていくんですけれども、例えば中小の企業ですと一つ一つの事業所にいらっしゃる従業員の数は非常に少ないと。そこで検診をセットするとなると、非常にコストパフォーマンスが悪すぎるということですので、お近くにある事業所が集まってこの日まとめて肺がん検診をやるよと、車を回します。この日、まとめて乳がん検診をやるのでマンモを積んでいる検診車を回しますということで、幾つかの企業体と一緒にグループとして検診ができるような、そういう企画立案を立てていくというようなことも考えておりますし、これまでもそういった取組をやってきております。

富山県の検診受診率の鍵の一つは、桃太郎旗もあるんですけれども、検診車というのも一つキーワードになるんじゃないかと思っています。そのハード、車があるというハードのことを言いたいのではなくて、アクセスがいいということだと思うのです。そのがん検診率を見ますと、これは私の印象ですけれども、郡部のほうが都市部、富山でいう都市なんですけれども、都市部よりもいい。それはなぜなんだろうと考えたことがありました。そうしますと、先ほど対がん協会の方からもご紹介が、塩見さんからもご紹介があっ

たんですけれども、検診車が縦横に山間部を走り回っているというのが本当のところ、公民館に検診車が行ったり、お寺の駐車場に検診車が行ったりとか、お年寄りであっても歩くのがとにかく大変という方であっても公民館までなら言ってみようとか、お寺に車が来ているんだったら乗ってみようとか、アクセスをいかによくするかと。僻地、山間部が多いということを手にとったような、そんな対策であったのではないかとことを思っています。

それから、ポスターはきれいな女性2人のポスターで、こういったものもJRであったり、あと銭湯にあったりとか、いろんなところに張ってたくさんの方が目に触れていただけるようにということを工夫しております。

それから、ヘリカルCT検診のモデル事業をやりました。いろんな問題がありましたけれども、この18年度までで14名の方、肺がんが見つかりました。93%がTNM分類のステージ1、その中でも非常に肺胞上皮に限局したような非常に早期のものが9割を占めていたということで、この成果を踏まえてリスクを、ハイリスク者に限るあるいは検診の間隔をよく考えるといったようなことをもちろん注意しながらなんですけれども、昨年度から低線量のヘリカルCT肺がん検診を50歳から70歳の節目年齢者が受ける場合には検診費を補助するというのも富山県は始めております。

国のほうで法律をおつくりいただいて、それに基づいて富山県でも計画をつくっているわけなんですけれども、いろんながんに対して、いろんな内容でもってがん検診をいかにあの手この手マルチチャンネルで攻めるかということで、いろんなことを考えています。その中でも乳がんについては、これは三、四十代のおっばいが張っている年代の方には超音波も一緒に入れてというのもモデルでやります。しかし、これは超音波だけということではありません。もちろんマンモとセットでやりますし、この後、超音波検診は時間がかかるので、実は待っていただく時間がすごく長くなるんです。受診率が落ちるかと思ったら、落ちませんでした。結構みんな興味があつて。その待ち時間を利用して、実は自己触診の検診法の普及の教育の講座をその待ち時間を使って、せっかく来てくれたからということで、ここでやるということで、その時間を逆手にとって普及啓発を頑張っていこうと思って、ことしからやっております。

あと、HPVの検査を入れて、郵送検診という形で何とか、これもアデノカルシノーマを拾えるわけではない、アデノカルシノーマも落ちてしまう可能性があるんで100%ではないんですけれども、とにかくまず受けてもらおうと、大事なんだということを伝えたい。こうなので補助、サポートになるんだと思うんですけれども、これも何とか入れていけな

それからもう一つ。節目年齢に加えてことしから重点年齢というのも考えていこうということになっていました。非常にサイエンティストが見ると何だこれはということかも知れないんですが、死亡率が急激に上がっていくおよそ10年前からがんは一步一步歩いてい



らっても救命率というか、死亡減少効果を生めないのではないかとということで、10年前倒しでやろうよということで、10年前の年代を使ってもっと節目よりも細かく年代を刻んで補助をしていこうと、キャンペーンをしていこうということでやっています。

これは一緒にがん検診というか、がん対策を取り組んだ仲間がぜひこれだけを見せてきてくれというので今日持ってきたスライドで、左から3番目にあるのが実は富山城で、ちょうど去年壁を白く塗り直してピンク色にほおを染めたような、初めてなんですけれどもピンクリボンキャンペーンで赤く染めさせていただきました。これは噴水、オレンジだったと言ってみんな怒りましたが、県庁前でたくさんの、高校生も来てくれる場所なので、こういったところでピンク色に噴水の色を変えて、その間なぜこれがピンク色なのか、なぜピンクリボンキャンペーンなのかといったことのご案内と一緒にキャンペーンを張りました。富山県は平成元年からがん対策本部を立ち上げて、ずっとがんを知り、がんに勝ち、がんとともに生きるという基本目標で、あれなんですけれども、がんと闘ってきました。

がんには治せるがん、治るがん、治らないがんがあるということのようですが、治らないがんであってもがんとともに生きられるように、また、治るがん、治せるがんであったらそれを知って勝ち抜いていきたいと、そういう気持で我々はずっとがん対策に取り組んでおります。

以上でございます。

○中川座長

ありがとうございました。

余りにすばらしいので、懇談会でまたちょっと別に議論をさせていただこうというふうに思います。

ちなみに、何年間このがん検診をなさってこられていますか。

○加納参考人

私は今のポストに8年おります。

○中川座長

すばらしい。それが大事ですね。

それでは、予定にないのですが、いつも予定にないことをやっていただける山田さんに、第1回目は私に急に歌を歌わされましたね。

○山田委員

そうですね。

○中川座長

覚えておられますか。

○山田委員

ええ。それで、2回目は団員を呼びましてスター混成合唱団、歌わせていただきまして。

○中川座長

あれは座長も全く知りませんでした。

○山田委員

今日、こういう会場でしたら、このステージがあれば今日やったほうよかったな。この間、非常に変てこりんな狭いところで大変申しわけなかったんですが、第1回のように私は無伴奏で、今できあがったばかりですがということでアカペラで歌わせていただいたものがめでたくCDになりまして、まだレコーディングという形には余りきちんとなっていないんですが、練習テープというのができ上がりましたので、今日は何となく聞いていただこうかなと思って。余興ですけども。

○中川座長

それでは、今私が持っているんですが、がん支えあいソング『あなたが大切だから』。NPOキャンサーリボンズ、スター混成合唱団。それでは、ちょっとかけていただいてもよろしいですかね。

(音楽再生)

あなたとつなごう その手と手  
いっしょに歌おう 大きな声で  
あなたのやさしさ あなたの笑顔  
わかっているよ ありがとう

つなげよう心を 虹のリボンで  
咲かせよう 心に愛の花を  
あなたが大切だから アイリスの花

あなたと歌おう この歌を  
一緒に歩こう 手を振って  
疲れたときには 休めばいいさ  
わかっているよ ありがとう

つなげよう心を 虹のリボンで  
咲かせよう心に 愛の花を  
あなたが大切だから アイリスの花  
アイリスの花

○中川座長

ありがとうございます。

○山田委員

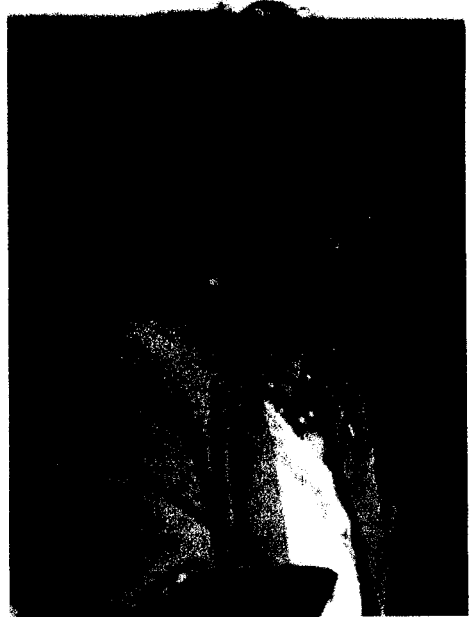
大変ありがとうございました。

○中川座長

すっかり上品に格調高くなりましたね。

○山田委員

6月21日が1年の大体半分だろうということ  
で、そのときに1年に1回でもみんなががんの  
ことを思って、思う日、考える日という感じで  
ね。それで6月21日の1日前なんです、6月  
20日にコンサートを開いて、そこまでに私たち  
が、がん撲滅のためにつくっているこのスター  
混成合唱団は今月も来月も再来月も京都の病院  
や三重の病院やなどを全国行って、これは練習  
テープなので4部に分かれているんですが、そ  
れぞれ企業や病院や学校などを回って練習をし  
て、それで6月20日に東京の笹川記念ホールな  
んですけれども、そちらのほうでみんなで歌お  
うということで、この練習テープも600円で、  
今インターネットで買えますので、これを買っ  
ていただくとまたチャリティーになっていくと  
いうようなことなんですけれども、このようなところまで進みました。



それで、3月は1日にテレ朝の下のところのumuという会場、3月7日は大阪の河内  
長野のラブリーホールというところ、それから若尾さんのところの、今度3月28日はがん  
センターのほうでこの歌をまた、国立がんセンターのほうでも歌わせていただくことがで  
きると思います。

頑張りたいと思います。よろしく願いいたします。

それでチャリティーが、やっぱりチャリティー金というのはそれをやるたびにちょぼとずつ集まるので、また対がん協会のほうも考えておりますし、今現在もちょびとずつですけれども病院とか小児がんの子供たちとか、そういうところにも寄附を続けております。頑張ります。

○中川座長

ありがとうございました。

それでは、私の進行が悪く少し時間が押しているのですが、よろしければ引き続きまして懇談会のほうに入りたいと思います。

どうでしょうか。先ほどの富山の取組、ちなみに今日は余りカメラもないので言うこともないのかもしれませんが、とりあえずカメラ撮りはここまでとさせていただきます。次の懇談会にはもう少しカメラが入るように関谷さん辺りがふれ回っていただくということも必要かもしれません。

○関谷委員

私……。

○中川座長

ぜひ、よろしくをお願いします。つまり、こういうことを言わなくても済むというのもちよっとどうかなという、そういうことでございます。

富山の取組は非常に重要な。均てん化ということの中にこういうこともあるんだろうなというふうに思います。ぜひ加納さんが今の仕事を続けていただくようお願いして、そして、やはり……。

はい、どうぞ。

○山田委員

そうですね。富山のは、すばらしかったですね。それで、本気なところがすごいですよね。そこまで気持ちがみんなでどうやって行き着いたのかと、そこがちょっと知りたいんですね。

○中川座長

何でここまで気合いが入っているのかということですね。

○山田委員

何でこうなっていたのか、そこをみんなの、ほかの都道府県が学んでいけばいいのではないかなと思いましたね。

○加納参考人

非常にクリティカルな質問で、私は責任の重大さをひしひし感じておりますが、富山県の皆さん、富山県民の性質として、まずとにかくまじめ実直というのがあると思いますのと、もう一つはいい意味で病気になって周りの家族に迷惑かけないよ、かけないでおこうという、そういう気持が強いのではないかなと私は思います。命は命として大事だし、一人一人の命なんですけれども、家族のつながりということを考えると、自分が病気になったときに一体だれが見てくれるんだろう、あるいはお母さんだったら子供の面倒をだれが見てくれるんだと。おばあちゃんでも、女性の就業率は非常に高い県ですので、私が病気になったら家事労働をだれがやるんだろうといったことを、いろんなことを、そんなに深刻には考えていないにしても、元気で病気にならないで迷惑かけないで生きていようという、そういう気持が非常に強い、そんなようなふうに、私はまずそれが根底にあるのではないかなと、そこに……。

○中川座長

みんなそうだと思いますよ、日本人。

○山田委員

そうなんだけれども、みんな何か白けちゃうんですね。

○加納参考人

そこに平成元年に大きなピークがあったと思うんですが、やはり忘れていけないと私が個人的に思っていますのは、行政の非常に強いリーダーシップでもって、がん対策推進本部というのを富山県が立ち上げて、それでみんなを引っ張っていこうというふうに、やっぱり行政がリーダーシップをとってシステムティックに見えない形で施策を敷いて、その中に県民性のまじめさがあってそれにみんなついていこうというふうにした、そのベクトルの方向が同じに向くような幾つもの要因が重なってこういう数字が出てきたのではないかなと、これは私の全くの感想でございます。

○山田委員

これは最初の何人かはすばらしいけれども、やっぱりリーダーが、何か189名と書いてありますけれども、この人たちもすごいですね。リーダーがそれぞれのところにいるというのはいいですね。どんな人たちなんですか。

○加納参考人

一言で言うと、怒られますけれども、お世話好きなおばさまたちです。やっぱり、それ

がないとできません。

○山田委員

おせっかいとかではなくて、例えば先生とか主婦とか、そういう。

○加納参考人

いえいえ、主婦の方です。主婦の方が多いのです。

○山田委員

そうなんですか。

○中川座長

それは、それになりたいと言って、自分で立候補するんですか。

○加納参考人

そうですね。立候補というか、まあ、立候補ですよ。余り押しつけではなくて、ひとあじ運動とかお年寄りのうちにお料理をたくさんつくったその分、ひとあじ分だけ持って行ってあげるとかそういった活動もしていらっしやる中で、今度はがんというものに特化して勉強されてがん推進員になっていくといったような、そういう。

○山田委員

やっぱり侮れないですね、そういうのがね。すごく勉強になりました。

○塩見委員

欧米の調査結果を見ますと、必ず周りから勧められて、親、家族、友人から勧められたから検診に行く、というのが圧倒的に多いですね。今のこのがん対策推進員、これが個別の受診勧奨になっているわけで、それらの方々が行って、さっきのおせっかいなおばちゃんたちが行ってやられると、これは行かざるを得ないということで、これは非常に見習うべきアイデアだと思いますね。これを全国につくれればかなり検診受診率が上がるというものではないですかね。

○中川座長

そうですね。27ページの肺がん、この異常なジャンプがあるわけですよ。これをやらないと、これを国レベルで達成できないと検診受診率5割できないですね。ですから、加納さんがやっていることの全国均てん化をする必要があつて、私が言うのもあれですけども、この委員の中に入ってもらったらいいいんではないですかね。いや、とにかくそういう

た、やっぱりこの会の在り方も、やっぱりどんだんいい事例は当事者として加わっていた  
だく必要もあるような気がしますよ。本当にそうです。

○山田委員

何か暗いんですよね。ともするとね。何か、この……。

○中川座長

あなた以外はね。

○山田委員

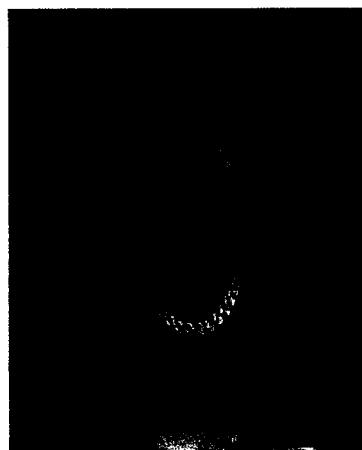
がんのことを考えている会に行くんだというだけでも何か、大変ねなんてね。だけど、  
富山のこの例を見たって、みんな明るいわけですよ。だから、何かこう、前向きに先に  
見つけてやるぞぐらいな気持ちになるのも、ちょっと富山から学んでいきたい感じがあり  
ますね。

○中川座長

平成元年に、その推進本部ができたわけですね。ここで激しく変わる。恐らく韓国も同  
じようなことをやったんですよ。それを国レベルで。ですから、僕は本当に個人的に韓国  
に行ってその真相を知りたいと思っているんですが、富山は日本なので一度行きますので、  
どうやって、ちょっと皆さんで行って、本当にそう思いますよ。

○関谷委員

本当に発想がすごく、私は思うんですけども、発想が  
生活に密着しているというか、ホームページでとか何か病  
院でとか講演会でではなくて、スーパーにのぼりが立つと  
か、銭湯もおっしゃいましたか、あとはお寺なんかもと  
いうような形で、物すごく生活者の目線だなと思うんです  
ね。いかにがんと関係ないところで告知をするかというの  
がすごく大きいのではないかなと。それこそ、検診車が幼  
稚園のお迎えや送りのときに来てくれて、その間先生が見  
てくれるんだったらぐっと検診が増えるというようなこと  
も前も言ったんですけども、やっぱり関係ないところ、  
だからメディアでも本当は新聞だけではなくて関係なさそうなファッション誌とか、そう  
いうところを取り上げたりという、いろんな意味ですごく今のは示唆的で、あっぱれでし  
たね。



○山田委員

本当に進んでいますよね。すごく一番最初に行っている、進んでいるところだなと思いますよね。どうしてメディアというのは、何かというと死んじゃうような、何かぐあい悪い感じのばかり取り上げるんですかね。今も乳がんだって、日本人は20人に1人でしょう。がんだけといたら、いろんながんがあるわけではないですか。がん大国。そうしたら、2人に1人と言われていたら、ここだって、ここを真ん中から切ってこっちがみんながんですよ。そうしたら、その人たちがみんな暗くなっちゃったらもう、日本じゅう真っ黒けになっちゃうわけですね。そこがちょっと嫌だなというふうにも思っていることと、だけれども、これだけ私が毎日のようにイベントに行くとコンサートに行くと、いろんなのに出てやって頑張っているのに、まだ受診率が上がらないとなると、明るく言うのもいけないのかな、死んじゃいそうなほうがいいのかなとか、いろいろ考えちゃうわけですよね。

○中川座長

いやいや、あなた以外は暗いんだ、きっと。

○山田委員

えっ。

○中川座長

あなた以外は暗いんだ、やっぱりまだ。

○山田委員

暗いんですか。

○中川座長

きっとね。それとやっぱり、ああやってボランティアの方、いい名前でしたよね。何でしたか。推進員。

○山田委員

うん、これ、いいですね。

○中川座長

これはアメリカなんかやっていますよ、こういうのね。やっぱり個別訪問をして。僕はちょっと知りたいのは、富山には対がん協会のバスが結構行っているわけですか。

○塩見委員



富山では対がん協会の検診が胃がんで93%、子宮頸がん100%、子宮体がん93%、乳がん100%、肺がん100%ですから、ほとんど我々の支部で受託しているということになりますね。

○中川座長

それで多分、同じような県を探して、そして受診率が低いところの理由を比較すれば、ここをやれば変わるというのは分かってきますよね。ぜひ塩見さん、次までに。

○塩見委員

そうですね、これを調べて、模範例として調べておきましょうね。

○永江委員

各都道府県の推進計画を見ると、「推進員」と挙げてきているところが結構ありますが、富山県ってやっぱり先駆けなんですか。一番最初なんですか。

○加納参考人

すみません、そこまで昔のことは私、全然。

○永江委員

私は平成元年と見ただけで、今日はすごい驚いたんですね。前回の懇談会のときに私も当社の活動について発表させていただいて、私どもの全国にいる募集代理店も啓発活動を日々やっているんですが、やっぱりフェーストゥーフェースって一番伝わるので、その人たちがこういうことをできれば、ということの前々から実は考えてはいたんですが、既にこれだけの実績がある県があるということを新鮮に今日びっくりして、本当に事例に学びたいなというふうに思いました。

○中川座長

バスの行き方なんていうのが、バスの配車の手配の仕方が、ほかとやっぱり違うんですかね。

○塩見委員

どうでしょうね。対がん協会支部は、やはり山間というか、人がなかなか行かないようなところまで行くというのが使命であります。それぞれ自治体、市町村さんのご希望に従って回しますから、ほかの県と違うということはないですね。沖縄などは離島へ、検診車が行けないところは機材を担いで行っていますからね。ですから、行き方は違うんではないんです。恐らくは対策推進員、この効果ではないかなと思います。